

男女共同参画委員会企画

JOYFUL通信

◆◆◆ 多様性を理解し育てられる指導医層が増えることを願って

東京医科歯科大学整形外科

瀬川 裕子

数カ月前、当科の前教授の退任祝賀会がありました。来賓の他科（女性が比較的多い科）の先生にご挨拶に行くと、「先生、見て、ほとんどが男性。これはまずいんじゃない？」とおっしゃったのです。私にとってはあまりにも当然の景色だったので、いかに自分が男性ばかりの業界に慣れているか改めて気づかされました。

2023年5月、日本股関節学会の海外研修制度で、フランスの病院を見学する機会がありました。ヨーロッパでもトップレベルの規模であるパリの小児病院の整形外科は、主任教授は女性、その他の主要スタッフも約半数が女性でした。小児整形外科は日本でも女性が多い分野ですが、それでも世界との差は歴然です。

2022年12月、第34回日本整形外科学会骨系統疾患研究会の会長を拝命しました。調べてみると、日整会の名で行われる会で女性が会長を務めたのは初めてのことでした。

5年ほど前から、「女性整形外科医」というくくりで、いろいろな仕事やチャンスがいただくことが増えました。逆差別と感じ

ることもあり、正直なところ居心地はよくありません。ただ、今はまだそうでもしないと女性の活躍を引き出せないとも感じます。それでも、私が整形外科医になった2000年ごろに比べれば、女性整形外科医の数は増え、妊娠、出産、子育てを経てのキャリア継続についても、ずっと環境はよくなっているとも感じます。これは、女性整形外科医の絶対数の増加、キャリア継続に対する意識の変化のみならず、社会全体の変化、それに伴う男性整形外科医の意識の変化によるところも大きいと思います。

女性医師が活躍するために大切なのは、長期的なキャリアを見据えた本人の意識・戦略と周囲の環境ですが、個人的に一番鍵となると思うのは、指導者層の医師、現時点では大多数が男性を占めるトップ層の意識だと思っています。大学でも病院でも学会でもその中心的存在の先生方です。組織のトップの意識はとても大切です。「女性」という枠組みのみならず、多様性を理解し、それを受け入れ、多様性のある組織を育てることができる、そのようなトップがこの

日整会の中に増えることを願ってやみません。

最後に、女性に限らず若い先生方にお伝えしたいのは、前回134号のJOYFUL通信で中島祐子先生が書かれていること、特に「自分が他の先生よりもちょっと得意と思える分野を見つけること」です。これがあると、仕事によりやりがいを感じられて、楽しい整形外科医人生を送れると思います。誰もが輝ける日整会になるように、私も精進していきたいと思っています。



2022年12月、第34回日本整形外科学会骨系統疾患研究会にて（後列左から2人目が筆者）